

秋子と雀と艦載機

湖條登四季

町外れの軍需工場は地下ではなかった。だから秋子は一羽の雀と知り合いになったのだ。秋子が仕事を始めると、窓に必ず一羽の雀がやってくる。窓枠に止まり首をかしげて、秋子が部品を加工するのをじっと見守っている。信じられないことだが、雀は何かを期待しているようではなかった。一度だけ弁当のご飯から一粒を窓枠に置いた。雀はそれを食べなかった。雀は見返りを期待しないうえにただひたすら秋子を見守っている。秋子も雀に見返りを期待しなかった。今は毎日のようにやってくるが、そのうちに来なくなるのではないかと思っていた。だから秋子は雀に名前をつけようとしなかった。

昭和二十年、早春。軍需工場へ行く途上、秋子は空にとてつもなく大きな雲がそびえ立っているのを見かけた。雀は小さいから、あんな大きくて高い雲には到達できないだろう。飛行機は到達できるだろう。飛行機は雲の中を自由自在に、自由奔放に飛びまわり、雲の形を壊してしまうのだ。日本軍の飛行機は、日本の上空の雲の中を飛ぶだろう。米軍から日本国民を守ってくれるからだ。でも全国各地で空襲が発生する今となっては、米軍の飛行機も我が物顔に飛びまわり雲という名の芸術を蹂躪するだろう。しかし怒りはなかった。

私も米軍の艦載機に機銃掃射されて死ぬかもしれない。帰宅時にはできるだけ胤子や房枝といっしょに行動するようにしているが、ほとんど何の意味もないだろうと思っていた。

秋子は本を読むのが好きだった。家はあまり裕福ではないのでさほど本を買ってもらえない。秋子はもっぱら、家が裕福で本を沢山持っている房枝から借りては読んでいた。友達だから、もちろんただで借りられるが、房枝は見返りを要求した。秋子が読んだ本の感想を聞きたがったのだ。房枝は自分と違う人間がどんな感想を抱くのが知りたかったのだ。房枝はまず、秋子が読んだ本のあらすじを語るのを要求した。そして、嘘偽りのない、正直な感想を聞きたがった。だから、房枝はまだ読んだことのない本のあらすじも知っていた。

この町は小さいから、空襲はされないだろうと言われていた。東京や大阪はものすごく大きくて、ものすごく沢山の人がいる。空襲するにはもってこいだ。隣の大きな町も

いつかは空襲されるだろう。だがそれはあくまでもほかの町のこと、この町のことではない。

だから、やがて秋子の兄の俊秀に召集令状が来るだろうことを、母親は不満に思っていた。俊秀は以前、胸を患ったことがあったが、いまの戦況を考えると、それも時間の問題だ。

ここは田舎だが、秋子の父親は無教養な田舎者ではなかった。第一、住民の知性と人口密度とは正比例しない。彼はいつもそう言っては家族を笑わせていた。そして、極めて危険なことを言った。どんな国がどんな理由で戦争をしても、戦争そのものが犯罪なのだ。いやしくも国家が、たとえ他国の国民だとしても、人に人を殺すのを命じるとは狂気の沙汰以外の何物でもない。

秋子の父親はそう言って戦場に赴いていった。娘に幾ばくかの本を、息子に確固たる信念を、そして妻に忍耐の大切さを残して。

もちろん、秋子の母親は本音を人に話したりはしなかった。それに、この平和な町も確実に戦いに巻き込まれている。例えば、秋子が通うあの軍需工場がそうだ。人を殺す道具を製造し、提供している。戦況が悪化したら、秋子の軍需工場も爆撃されるかもしれない。そのとき、秋子の命はほんの偶然に左右されることになる。そこで働いているときに艦載機が来たらおしまいだ。俊秀は言っていた。あつという間だから、逃げる暇はないだろう。秋子はそれを聞いても実感がわかなかった。自分の命が危険にさらされるという状況が想像できなかった。

ただ、学校で勉強できなくなってしまったのが悔しかった。気を紛らわせてくれるのは、唯一、兄の俊秀だけだ。

俊秀は話をするのが得意だった。どんなに平凡でなんと言おうことのない出来事も、彼が語れば、極上の掌編になってしまう。もちろん、それらを紙に書いてもいた。新聞や雑誌に投稿することはないが、それらを溜めておいて、いつか世に出そうと思っているのだった。

俊秀の最初の聴衆は秋子だった。俊秀はこれだけは譲れないと思っていたし、それを秋子に打ち明けて憚らなかつた。俊秀は優秀な聞き手を必要としており、それは最も身近に存在する、ほかならぬ実の妹だったのだ。

お金持ちではなくてラジオがない環境にあつては、兄の語りは、秋子にとっては読書と双壁をなす貴重な娯楽の源泉なのだった。

俊秀の幼馴染みの稲子が、俊秀のお話のいくつかをまとめて整理し、それに絵をつけて絵本にしていた。

なにも、それで商売をしようというのではない。実際に俊秀は稲子と共に絵本を製本して出版社に持ち込んだりしなかった。自分たちの作ったものをこの世に残しておきたいという気持ちが強かっただけだ。それに絵を描くのが無上の喜びだった稲子は、とにかく絵にする題材がほしかったのだ。

「もしも僕が戦争に行ったら」と、俊秀はよく言ったものだ。「戦地から毎日手紙を書くよ。話したいことがたくさんあるんだ」

「じゃあ行ってしまってもお話はつづくの？」

「ああ。直接話すのはちよつと違うと思うけどね。でも手紙でもきつとうまく伝えられると思う。それでいくつかお願いがあるんだ」

「なあに、お兄さん」

「僕が書いた手紙を、一枚残らず取っておいてほしい。本当に、一枚残らずだよ。戦地のことを書いたところも、お話の部分も。たとえ僕が戦死しても、ずっと持っていてほしい」

「そんな悲しいこと言わないで」

「そして、稲子ちゃんにも手紙を残らず見せてほしい。稲子ちゃんに直接手紙を書くこともできるが、なにしろ同じ話を二度書くのもつらいし、第一そんな時間はないと思うんだ」

「うん。わかった」

「特にお話の部分は必ず稲子ちゃんに見せること。彼女は絵にする材料が必要なんだ」「それも約束する。安心して」

「秋子も安心するんだよ。大丈夫。僕はきつと生きて帰ってくるから」

秋子は頷いた。頷くことで、涙が零れるのを阻止することができると思っていた。なぜなら、俊秀がなんら根拠のないことを言っていることが明らかだったからだ。

秋子は再び、試しに窓枠のうえにご飯を一粒置いてみた。雀はすでに窓枠に止まっていたので、指は雀から数センチの距離にまで接近した。雀は微動だにしなかった。あの小さな頭で、秋子が危害を加えないことを確信しているのだろうか。ただ、始終首を右に左にかしげるだけだ。

ご飯粒を置いて、雀はそれに見向きもしなかった。どこかで餌をたらふく食べて、もう満腹なのだろうか。それとも人間の匂いがするものは口にできないとでもいうのだろうか。

窓は開けてある。それでも、雀は工場の建物に入ってきて、秋子やそのほかの学徒の

作業を妨害することはなかった。

単調な作業が耐えられるのはひとえに兄の俊秀の語るお話のおかげだ。秋子は決して学校の成績はよくないが、兄のお話については、驚異的な記憶力を發揮した。その一字一句を、兄の語りで頭の中に再現できるほどだった。だから、頭の中ではいつも面白い話が展開されており、秋子を退屈にはさせないのだった。

この雀も人間の言葉が理解できたらなあ。そしたら兄さんのお話をわたしが語って聞かせてあげるのに。

夕方、太陽がようやく西の空で色づきはじめて頃秋子たちはやっと作業から解放された。

「あんみつ食べたい」

帰り道、秋子と胤子と房枝が一緒に歩いていると、房枝が突然言った。

「買い食いはだめなのよ。寄り道もだめ」

秋子は杓子定規なことをじつに楽しそうに笑いながら言った。

「わたしも食べたい」

胤子が迎合する。

「買い食いがいやなら、あんたは仲間はずれよ」

房枝があまりに楽しそうに言うので、秋子は自分が決して仲間はずれにはされないことを確信した。

「別に買い食いするつもりはない。ねえ、私たちは模範的な女学生で通ってるでしょ？ バレなきやいななんて思ってもいないし。おいで。もつといい手段がある」

房枝が足早になった。それは次第に駆け足に変化していった。秋子と胤子について行くのが精一杯で、彼女がどこへ向かっているのか、見当もつかなかった。

気がつくとも房枝のお屋敷の前にいた。

「さあさあ入って」

三人は離れの縁側に陣取った。まもなく使用人の女性が現れる。房枝が使用人にふたことみこと指示すると、彼女の言葉は三人分のおんみつに変わってやってきた。

非常に上質で上品な味のおんみつだった。あるところにはあるのだ。裕福な家の房枝が友達だったので、秋子も胤子もそのことをよく知っていた。戦争に行かなくてもいい人種がいるのも知っていた。二人とも、世の中の裏側を垣間見た気がした。それを言えば、房枝は何も学徒勤労員として軍需工場に通う必要はなかったのだ。ただ房枝の父親が隣の大きな町で高官をしており、皆に示しがつかないので仕方なしに通わせているのだった。

あんみつを食べ終わる頃には空はもう薄暗くなりはじめていた。まだ居座ろうとする胤子を尻目に秋子が帰ろうとすると、房枝が呼び止めた。

「ただで帰らせるとでも思ったの？ あんたにはやってもらいたいことがある」

房枝は母屋へ走っていき、帰ってきたときには手に一冊の本があった。

「もう読む本がないんでしょ。これを読んで」

「どんな本なの？」

「こういう本」

秋子は房枝から本を渡され、その表紙に目をやった。

武器よ・さらば アーネスト ヘミングウェイ

函入りの重厚な本だ。翻訳物だとは理解したが、この作者の名前は知らなかった。

訳者は小田律という人。天人社というところから出ている。奥付を見ると、初版は昭和五年九月十二日だ。

「敵性文学よ」

房枝が事もなげに言った。

「いや。読めない」

「同じ日本語だから読めるわよ」

「そんな本、どうしてあんたの家に」

「お父様が東京へ行ったときに買ってきたのよ。なんでも、裏というものはあるのよ」

秋子は観念した。房枝がすることを誰も阻止することはできない。アメリカ人の小説というものも関心がないわけではなかった。

「どんな話なの？」

「知らない。ただお父様はアメリカ人の兵隊さんの話だって言ってた。ねえ興味あるでしょう。米兵だって結局はただの人間よ。きつと弱点はあるはず」

「それをわたしに探れって？」

「とんでもない」房枝は声を出して笑った。「ただ普通の小説として読めばいいのよ。で、いつものように感想聞かせてね」

「あ、ありがとう」

「ねえ、くれぐれも他の人には見つからないで。家族にも話しちゃだめ」

帰り道が途端に危険なものに思えてきて、秋子は始終駆け足だった。

恐怖と好奇心が同じくらいあった。アメリカの兵隊がいったい何をし、何を考えるのか、未知の領域は途方もない好奇心をかきたてると同時に、知ってはならないという強迫感を膨張させもした。第一これは読んではいけない本なのだ。房枝の家にあった本だと言っても大目には見てもらえないだろう。うちは貧乏で、房枝の家はお金持ちだ。私はお咎めを受け、房枝の家は何ら罪に問われないだろう。世の中はそういうものなのだ。しかし約束は約束だ。兄の俊秀にも見つからないようにいつも鞆の奥底に押し込んでおき、読むときだけそと取り出した。自分の部屋というものがなかったので、誰かに見咎められないように読むのは至難の業だった。幸い懐中電灯だけはあった。みんなが寝静まったあと布団をかぶって、その中で懐中電灯の光を頼りに読んだ。

読み終わって、布団から這い出して本を鞆に戻そうとしたとき、俊秀が目を見まわして、

「何を読んでいるんだい？」

俊秀の温かい微笑みに凍りついた。人生は終わったのだと思った。だが一瞬後に思い直した。お兄さんは憲兵ではない。秋子は本を俊秀に差し出した。

俊秀の顔色は変わらなかった。

「房枝ちゃんに借りたんだね」

そのへんの事情を、俊秀はよく知っている。秋子は素直に頷いた。

「面白かった？」

「というか複雑だった。だって出てくるアメリカ人が心豊かで温かみがあるんだもの。日本人はどうしてアメリカ人を鬼畜というの？」

「秋子は現実を知ったんだな」

そうかこれが現実を知るといふことなのか。

「なんだかわたし、こんなアメリカの人に勝っちゃいけない気がする」

「というより、戦争そのものがいけないって思ったんだらう？」

「うん」

「そういう気持ちには、僕だけに言って、他の人たちには内緒だよ」

「ねえ、お兄さんも戦地へ行ったら、こういう人たちと戦うことになるの？」

「そうだらうね」

「どうしても戦わなければならないの？」

「それが戦争というものなんだよ」

「いやでしょ？」

「人を殺したくはない。だけど、戦争で敵を殺しても、処罰されるどころか褒められる

んだ。思い切り矛盾してるよ。でも、僕は戦うだろう。戦わなければ、家族を巻き添えにしてしまう」

知らず知らずのうちに涙が右目の端に一粒形成された。

「じゃあ、お兄さんは父さんや母さんや私のために戦うの？」

「誰でもそうだと思うよ」

「逃れられないの？」

「うん。でも、戦争が終わったあとでは、ひどく後悔するだろうな。もしも生きて帰れただけど」

「じゃあ、もしも仲間の兵隊さんがアメリカ兵に殺されても、怒ったりしないの？」

「怒るより悲しむだろうな」

「戦争に行かないで」

「行かないと家族がとんでもない目に遭うんだよ」

左目の端にも一粒の涙が浮かんだ。

「お兄さんが徴兵される前に戦争が終わることを祈るわ。たとえば、負けてもいい」

「そんなに都合のいいようにはならないさ」

「祈るだけならいいでしょう？」

「もちろん。だけど僕はもう覚悟している。さあ、もうお休み」

目の端にとどまっていた涙が布団の上にこぼれた。

稲子が秋子の家にやってきた。俊秀が創作した物語につけた絵を見せに来たのだ。

俊秀は秋子を通っているのとはまた別の軍需工場に通っている。隣の大きな町にある工場で、とても大きな工場らしい。東京や大阪はさんざん空襲されて、米軍はまもなくあの町も空襲するのではないかと言われていた。父も母も気が気ではなかった。もしも作業中に空襲されたら。軍が使うものを作っている工場で働いているのだから、真っ先に空爆されるだろう。そしたら一巻の終わり。兵隊に行く前に死んでしまったとしたら、それこそ何の意味もない。父も母もそう言っていた。だって、戦いもせずに死んでいくんだから。せめて、一矢報いてほしいものだ。

それでも、俊秀は政府が命じるままに淡々と隣町の軍需工場に通い、淡々と作業をしている。そして帰宅すると淡々と物語を紡いでいる。

秋子は兄がなんのために物語を書いているのか、考えたことがあった。たとえ死んでも、この世になにかを残しておきたいというのが、俊秀のいつもの口癖だった。つまりは、将来のための物語だ。しかし、秋子はそれになんとか違和感を覚えていた。俊秀

は物語をひとつ完成させると、すかさず秋子のところへ持ってくる。秋子が自分で読むこともあれば、短くて簡単なものは俊秀自らが読み聞かせすることもある。つまり、俊秀のすべての作品の最初の読者は、決まって秋子なのだ。それが無上の喜びでも、心苦しきでもある。兄は明らかに、私を喜ばせるために、楽しませるために物語を紡いでいる。功利的な意図があれば、ただ私のためだけに書くことはないだろう。しかし兄は物語を一度も新聞や雑誌に送ったことがない。つまり口では将来のための物語といっているが、実際には今のための物語なのだ。

これについては、俊秀は明確な理由を明らかにしている。自分の作品が目にとまっても、戦意高揚のために利用されたくないというのがその理由だ。新聞社や出版社に、戦意高揚を目的とした物語に書き換えるよう依頼されたら、断ることはできないだろう。途端に軍の奴隷となり、拒否すれば抹殺されるのだ。戦意高揚のための物語を新たに書くと依頼されるのも困る。

だから俊秀としては、もしも作品を新聞や雑誌に売り込むとしても、戦争が終わってからのほうがいいと思っているのだった。

その俊秀が稲子をさほど待たせずに帰宅した。俊秀は喜んだ。稲子に絵をつけてもらうのが、まるで天からの恵みのように思っているようだった。立場としては、稲子に絵を描いてもらっている身だ。そのことで、俊秀はくどいぐらい感謝する。もちろん稲子は自分があくまでも素人の絵描きだと自覚しているので、反対に俊秀に感謝するのを忘れてはいなかった。

稲子は秋子の家の居間に、畳の上にたくさんの絵を広げた。

実際には水彩画だ。簡単によごせてしまうので、俊秀は慎重に扱った。秋子は絶対にさわろうとしなかった。いちど、稲子の絵を見て泣きそうになったことがあったのだ。どうして泣きそうになったのか、全くわからないが、それのもととなる兄の物語と相俟って、絵の中の風景が命を持ったのだろう。だから、もしもまた感動して涙をこぼして、絵に落ちて台無しにしてはいけないと思っていたのだ。

俊秀と稲子はいかにも全幅の信頼を抱き、互いに見つめ合ったりするのだった。それを見て秋子は、ああ、この二人は遅かれ早かれ、戦争など関係なしに結婚するのだなと思った。

東京も大阪も、そのほかの大きな町も軒並み空襲に遭い、あとは隣の町しかない、多くの人が思っていた。

秋子は俊秀から聞いて知っていた。本当は、戦争で非戦闘員を無差別に殺すことは許

されていないのだという事実を。

しかし、アメリカ軍は現にそうしている。これまた俊秀が言っていることだが、空襲の被害者は、その大部分がお年寄りや女性や子どもたちで、働き盛りの男性や兵隊さんはほとんど含まれていない。それがどうしても信じられなかった。いったい誰が決めて、いったい誰が命令して、いったい誰が実行しているのだ。

ヘミングウェイという人のあの小説の中では、アメリカ人は誠実で思いやりのある人だった。その同じアメリカ人が、罪もない人を大量に殺している。怒りはなかった。ただ、不思議に思うだけ。

だが、戦地に赴けば、日本人だって外国の人々を殺す。そのことも重々承知していた。それにしても、隣の町はいったいいつ大空襲になるのだろうか？ いったいどれくらいの人々が死ぬのだろうか。兄さんは巻き込まれるだろうか。兵士として戦地に赴きもしないで、戦死してしまうのだろうか。ああ、もう隣の軍需工場へは行ってほしくない。私はひどく悲しむだろうか。それよりも、稲子さんのほうがもっと悲しむだろう。

それにしても、機載艦という言葉がなじみのものになってしまったことが不思議だ。字の通り、戦争をする船に載つけられた、戦争をする飛行機。日本人なら誰でも、機載艦という言葉を知っている。そして、それを不思議ともなんとも思わない。戦争がなければ存在意義の皆無なものを、人は当たり前前の存在として考えている。

父親が残していった言葉が、いまでもその口ぶりともにありありと蘇る。人が人を殺すのが犯罪であると同時に、人を殺すのを命じるのも犯罪だと。父親は貧乏な家に生まれ、まともな教育を受ける機会も与えられず、ただ役所の雑用に身をやつす人間だったが、なぜか本が好きで、古今東西の名作を読み漁っていた。小説も好きだったが、結婚して子どもを持つようになってからは、むしろ思想書が好みになった。人生論、幸福論、政治論、戦争論。下働きの命令されるだけの生活で獲得した経験的知識もさることながら、歴史上の名だたる思想家が彼に大きな影響を与えた。特に息子の俊秀には、世の中からよく知り、その実態を把握するよういつも言っていた。俺のような、下働きだけの人間になるな。かといって、世の政府に迎合するような立場にも身を置くな。おまえは物を書くのが好きだから、いつかは新聞記者か雑誌記者になればいい。でもいまはその時期じゃない。いまの新聞も雑誌も、書きたいことを書かせてくれない。おまえが大人になる頃には、この戦争も終わっているだろう。そうしたら、きっとものを書く人間になって、自分自身が体験した戦争のことを書いて、人々に伝えるがいい。

幸いなことに、秋子と俊秀の父親はまだ戦地にありながら生きていて、ときおり便りをよこす。もちろん、手紙には当たり障りのないことしか書かれていない。しかし、父

親の口ぶりに馴れていたふたりは、そこに皮肉めいた真実を嗅ぎ分けることもできなかった。

戦争はいつか終わる。そしたら、艦載機は無用の長物になるだろう。戦艦や軍事車輛とともに。人を殺すだけの機械。途方もない無駄。それを言えば、私のしていることだって壮大な無駄だ。何しろ戦争に使う航空機の部品をせつせと作っているのだから。艦載機かどうかかわからないが、とにかく戦争をする飛行機なのだ。戦争が終わったらもちろん私のこの学徒勤労働員も終わるが、それ以前に学徒勤労働員そのものが無駄で、戦争自体が無駄なのだ。

ふたたび鞆の底にしよばせて工場へ持っていくのが苦痛でたまらなかった。あの、ヘミングウェイというアメリカ人の本である。持っていることを知られること自体が言語道断だが、それを携行するなど、狂気の沙汰である。しかし、借りたものは返さずにはいられない。房枝は催促しないが、わたしは彼女に本のあらすじを教え、感想を告げる義務を負っている。

どうして彼女はわたしに、もっと当たり障りのない本を貸してくれないのか。集中できないながらもなんとか間違いを犯すこともなく、作業は終わった。

帰り道、房枝はまた秋子と胤子を自宅に招待した。このところ週に二回は招かれている。房枝はどうやらそれを、裕福な人間の義務だと思っているようだ。秋子と胤子の家族だけをえこひいきすることはできないが、少なくとも何かを提供できる立場にはある。房枝の母親も秋子と胤子を歓迎した。胤子は女学校で一二を争うほどの秀才だったし、秋子は読書家で、本のことを何でも知っているからだ。

その日、三人は離れの縁側で葛切りをごちそうになった。胤子は純粹に喜んでいるが、秋子は自分たちだけいい思いをするのがなんだか心苦しかった。

「で、読んだの？」

房枝は言った。

「う、うん……」

秋子はためらいながら本を鞆から取り出した。

「どんな本か、口外しないと約束できる？」

房枝は胤子に言った。

「できる」

秋子からいったん受け取った本を、房枝は胤子に渡した。

「わたしたち、とんでもない危険なことをしてるね」

「だから口外しちゃ駄目って言ったの」

「わくわくするわ！　こんな秘密、滅多に持てない。ねえ、私たち、大日本帝国の敵？」

「それを言うなら反乱分子よ」

「なんだか格好いい名称ね」

胤子と房枝ははしゃいでいる。だが、秋子はどうしても同調するのがためられた。

「どんな話なの？」

言われて、秋子は『武器よ・さらば』のあらすじを丁寧に話した。

「へえ、アメリカ兵もどこのつまりはごく普通の人間よね」

胤子が言った。

「当然でしょう」

房枝がこたえる。

「なにも、血が緑色なわけじゃない。切れば赤い血が出てくる。確かに、兵隊だから戦うのは事実だけど、恋もする。人を愛するという点では、きっと日本人と何ら変わらないと思うわ。で、秋子はそのことについてどう思ったの？」

「……血も涙もあるアメリカ人と戦争してはいけない気がした。というか、戦争している場合じゃないと思った。同じ人間なんだから、戦争するより話しあって、国と国の問題よりもっと大事なことを解決しなきゃいけないと思った」

「秋子らしい意見ね」

房枝は微笑んだ。

「わたし、どうして日本がアメリカと戦争するか、わかるような気がする」

胤子が言った。

「どういう意味？」

「あんたが言ってた。アメリカは豊かな国だって。日本みたいな、貧乏人だらけの国じゃないって。その裕福な人間たちが、自分たちと同じ人間であることが許せないのよ」
「なるほど。でも戦争してるのは事実よ。避けようがない。では私たちはどうしたらいいんだろう？」

「軍需工場で働くのを拒否するとか？　それとも、わざと欠陥品を作るとか？」

胤子の意見はいつも単刀直入だ。

「それは違っていると思う」秋子は静かに言った。「拒否したら、日本は戦えなくなる。戦えないと、死ぬ。欠陥品を作ったら、そのせいで飛行機が墜落し、日本兵が、つまり日本人が死ぬ」

「それもそうよね」

房枝が頷いた。

「どうでもいいけど、わたしたち、学徒勤労動員とはとうてい思えないようなこと話しあってるよね」

胤子のこの意見に、房枝が反応した。

「でも、これは大事なことだと思うわ。お上の言いなりだけじゃ、国民じゃないって、私の父さんがいつも言っている。いちいち逆らうのもなんだと思うけど、意見を持つのは大切だし、当然だと思う。私たちのような小娘だって、国によくしてもらいたいと思うでしょう？ 国が戦争しているからと言って、人生そのものを戦争に捧げるなんて、間違ってると思う。戦争をしているいるにかかわらず、私たちには私たちの日常があり、人生があり、将来の夢があるのよ」

使用人が葛切りの残骸を下げに来た。三人は話し合いに熱中するのをやめた。

「満足した？」

房枝が秋子に言った。

「ありがとう。でも、葛切りは確かにおいしいけど、これで満腹してたら晩ご飯が喉を通らない」

「葛切りのことを言ってるんじゃないのよ。本のことよ。アメリカ人が書いた本を読んで、頭の中がいっぱいになったんじゃないの？」

「たしかに。しばらくは別の本を読む気になれない」

「じゃあ、また読みたくなったら言ってね」

「アメリカの本はもう、ちょっと勘弁かもしれない」

「いいのよ。あんたが憲兵に引っ立てられるのを期待してるんじゃないから」

三人はやっと笑った。

「ねえ、その本、わたしも読みたい」

「読みたいなら貸すけど、大丈夫なの？」

「大丈夫。持ってるのを悟られない。隠れて読む。たとえ家族にもばれない」

「じゃあ、持って行って」

房枝は本を胤子に手渡した。胤子は実にうれしそうな顔で本を鞆に入れた。

朝、目が覚めたときから小雨が降っていた。

こういう、しとしとと降る雨は長引くものだと、母はいつも言っていた。その通りになった。工場に到着し、作業を開始しても、雨は同じような調子で降りつづけていた。単調な雨音は気分を塞ぎがちにしてしまう。何に対しても気が乗らない日だった。工場

での作業だけがいつもと同じ調子でつづいていく。

就労してしばらく経ってから気づいた。

窓辺に雀の姿がない。

雨だから飛んでこれないのだろうか、最初は思った。だが、すぐに思い出した。もつと激しい雨の日にも、あの雀は窓辺に姿をあらわした。なにも、今日の雨だけ毒かなにかが混じっているわけではない。明らかに、ほかの理由があるのだ。ただ、それが自分ではわからないだけなのだ。

いったん気づいてしまうと、もう作業に集中できない。お昼休みに探しに行こうかとすら思った。だが、空を飛ぶ生き物をどこに探すことができないのだろうか。それに、雨だからか、どんな雀も目につくところへ出ては来ないのだ。たとえ雀を見つけたとしても、あの雀だと区別できるだろうか。

同じ部屋の、わりと近くでいつも作業をしている胤子がそれに気づいた。胤子は心配そうに窓枠に目をやり、秋子に視線を送った。

「雀、来ないわね」

お昼休み、一緒に弁当を食べているときに、胤子が言った。秋子は声で返事をしないで、ただ頷いた。

胤子はどうしたのかなとか、なぜ来ないんだとかは決して言わなかった。ただ事実を口にしただけ。理由や憶測を言っても秋子が返答に窮するのではないかと思ったようだ。理由なら秋子が自分自身でさんざん考えている。

それにしても。雀の生態を知らないから、理由を憶測することすらできない。例えば、他の雀と喧嘩してひどく怪我をしたとか。しかし、雀が仲間内で喧嘩をする生き物なのかどうかもわからない。例えば、牝の奪い合いをしてコテンパンにされたとか。しかし、あの雀の性別すら知らないのだ。例えば、車に轢かれて死んでしまったとか。この街は田舎だから、滅多に車は通らないけれど、それでも役場の人間が車を使っているし、工場に軍用車も行き来する。

もう二度と会えないのだろうか。

そう思っても、泣けなかった。長い人生の、ほんのひとつき。記憶に残らない程度の出来事。そもそも、野生の生き物と人間との接点は非常に希薄だ。だから、秋子は雀に名前をつけなかったのだ。名前をつけてしまえば、自分のものになってしまいそうな気がする。

別の部屋で違う作業をしている房枝が弁当を持参してやってきた。

「ねえ、雀がないのよ」

胤子が房枝に言った。房枝はとっさに窓辺に目をやり、それから心配そうな顔を秋子に向けた。

「大丈夫？」

「うん……」

涙が浮かびそうになり、秋子は慌てて額の汗を首に巻いた手ぬぐいでふいた。

「大丈夫よ」

胤子が言った。いかにも秋子を慰めようとする口調ではなかった。

「雀は野生よ。しぶとく生きるわ」

お昼休みが終わり、作業が再開される。結局、その日は一度も姿を現さなかった。

ただ単に、好きな牝ができただけならいいのに。でなければ、牡に求婚されたとか。それにしても、さえずらない雀であった。

次の日、雀はいつもの窓枠に姿を現した。

ひどく傷ついた姿で。

窓枠に立っているのも辛そうな有様だった。秋子は駆け寄ろうとした。できなかった。到達する前に、雀が行ってしまったからだ。

仕事を開始してしばらくすると、雀は戻ってきた。

秋子はそれ以上近づこうとはしなかった。心は引き裂かれた。どうしても仕事の手につかない。だけど、たとえ仕事を放棄しても、傷ついた雀にながしてあげられるだろうか。

整った、きれいな模様が台無しだ。羽毛がところどころほつれ、毛羽立っている。かすかに赤い部分も見られた。これは人間が治療してあげなければならぬものなのだろうか。しかし、ほんの一羽の雀に、誰が手を差し伸べるだろうか。そして、わたしが手を差し伸べても、どうしようもない。このときほど無力感を覚えたことはなかった。

雀は不安定な立ち方のまま、窓辺に居座りつづけた。いつにも増してさえずらない。もはやさえずるだけの体力もなくなってしまったのか。では、どうしてそこに、窓辺にいつづける？ その姿は、なにか重大なことを必死に伝えようとするかのようだった。

ようやく一日分の仕事が終わる。目を向けると、雀の姿がなかった。作業の後片づけをして、帰る支度をする。しかし、なかなか立ち去れない。もう一度だけ、雀の生きている姿を見たかった。胤子も始終気にしていた。しかしあまりにのらくらしていると、叱られて追い出されてしまう。

ようやく、とうに消灯された部屋を胤子とともに出ていこうとした。

その瞬間、雀が凄まじい勢いで窓から飛び込んできた。

あの傷ついた体のどこに力が残っていたのか、雀は秋子と胤子の頭上をでたらめに飛び回った。秋子も胤子も悲鳴を上げた。何がどうなっているのか、さっぱり分からない。ただ、両手をでたらめに振り上げて、雀の攻撃をかわそうとするだけだ。

二人の悲鳴を聞きつけたのか、工場長が部屋に入ってきた。

「なんだ、雀ごときで」

工場長は手近にあった仕様書の束をまるめて棒にして、雀に向かって振り回しはじめた。

いくら傷ついても、雀のほうがすばしっこい。工場長の棒は雀に全く当たらなかった。それでも、どんなに攻撃を受けても雀は出ていかなかった。しつこく飛び回り、それはまるで秋子と胤子が部屋を出て行くのを阻止しようとしているかのようだった。

あんなにおとなしかった雀が、どうしてこんなに凶暴になったのか。

怒りも悲しみもなかった。ただ、その理由を知りたかった。秋子は何かを語りかければ、雀をなだめられるのではないかと思った。そのために帰宅が遅れてもいい。それに、怪我をしてあんなに飛び回っては、命の危険まで考えられる。なんとかしなくては。

工場長の攻撃は一度も成功しなかった。彼はこの部屋の主任の田中を大声で呼んだ。「何とか雀を追い出して窓を施錠しろ。さあほさつとしてないで、みんな部屋から出ろ！」

そう言い放ち、工場長は最後に一度だけ、持っていた仕様書の束を投げつけるように雀に向かって振り回した。

この最後の一撃が、雀に見事命中した。

秋子と胤子は同時に悲鳴を上げた。雀は直ちに工場の床に墜落した。駆け寄ると、雀は横向きに倒れてひどく震えていた。まるで呼吸音が聞こえてくるかのようにはぜーぜーと息をしていた。

工場長は途方に暮れたままの顔で立ち尽くしていたが、すぐに部屋を出て行った。

「どうしよう。ああ、どうしよう」

胤子が泣きながら言った。秋子は声も出なかった。

秋子が両手でそっと雀を抱き上げようとする、いままで一度も声をかわしたことはない田中主任がそれを遮った。

「下手にさわっちゃいけない。そのままにしておいて」田中主任が真顔だったので、秋子はその通りにした。「骨が折れているかもしれないからね。むやみやたらに動かしちゃ駄目なんだ。ああ、これはひどいな。自然に治る怪我じゃない。人間が助けなきゃ」

秋子はその場にしゃがみ込んだまま、同じくしゃがみ込んでいる田中主任の顔に目を向けた。

田中主任の真顔は笑顔に変わった。

「大丈夫。遠い親戚に獣医がいる。連絡したら来てくれるだろう。」

「な、なんとお礼を言っているか」

「工場長を恨むなよ」

「は、はい」

「後は僕に任せて。さあ、もう行きなさい」

秋子と胤子は立ち上がった。雀のあえぎは収まってきている。しかしふたりが部屋を出て行こうとすると、雀はとたんに断末魔のような金切り声を上げはじめた。秋子と胤子は思わず足を止め、雀と田中主任を振り返った。

「大丈夫。痛いのかどうかかわからないが、どうやら興奮してるだけのようだ。安心なさい。これだけの声を上げられるだけの体力がまだ残っているということだ」

「ねえ、やっぱり引き返そうよ」

帰り道、胤子は秋子と房枝に何度も訴えた。そのたびに房枝は険しい顔になり、秋子は泣きそうになった。

房枝は言った。

「わたしなら、田中主任を信用する。考えてごらんよ。わたしたちが引き返したって、できることは何もないよ」

それでも胤子は納得しなかった。胤子はとうとう、道の真ん中で立ち止まってしまった。「だったらあんた一人だけ引き返しなさい！」

房枝は声を荒げた。

「お願い、こんなところで」

秋子はふたりをなだめようとしたが、何をどうしたらいいかさっぱり分からなかった。空から、どこか遠くから耳慣れない音が聞こえてきた。

音は急接近して、三人が何事かと空を仰ぐ頃には、音は実体のあるものに変わっていた。そして三人は、生まれてはじめて米軍の機載機を目の当たりにした。

胤子と房枝が反射的に走りはじめた。房枝がとっさに引き返して、立ち尽くす秋子の手を力いっぱい引っ張った。

機載機は豆粒からすぐに実物大になり、同時にタタタタタタという音を発しはじめた。機銃掃射がはじまったのだ。

三人は防空頭巾を片手で押さえてまっすぐに走った。房枝はすぐに秋子の手を離れた。幸いにも、そこは野っ原のあぜ道ではなかった。両側に、一般家屋が建ち並んでいる。しかし、機銃掃射は完全に三人の姿を捉えている。土埃が鋭く舞い上がった。すぐに、艦載機は三人を追い越した。それでも秋子は走るのをやめられず、数秒後にやっと、一軒の家の軒先に身を隠した。

機銃掃射はやんだが、艦載機が飛行する音はまだ聞こえてくる。

そこで、秋子は自分が一人きりであることに気づいた。

とっさにいま来た道を振り返った。

ふたりの人間が地面にうつぶせに倒れていた。一方は数メートルの距離だが、もう一方は足を伸ばせば触れるような距離だった。

それが胤子と房枝であることに気づくのに、数秒を要した。

房枝はちょうど秋子の手を離れた位置に倒れていた。うつぶせで、表情も見えず、どこを撃たれたのかもわからない。だが胤子は生々しさを強調するほど至近距離で倒れていた。それが胤子だとわかったのは、モンペの模様が判別できたからだ。だが、防空頭巾の模様では判別できなかった。

防空頭巾は真っ赤に染まっていたのだ。

ふたりとも、立ち上がるどころか微動もしないのを見て、秋子の全身はひどく震えた。軒の下から、恐るおそる空を見上げる。艦載機の音はもうしなかった。跡形もなく行ってしまった。まるで、どこか目的地へ飛行する途中で人の姿を見かけたので、ついでに機銃掃射しただけのように思えた。

ひどく震えながら、秋子は激しい憤りを覚えた。

艦載機に対しての憤りではない。アメリカ軍でも、一般的な意味でのアメリカ人でもない。女学校や軍需工場にいる大人たちに激しい憤りを覚えた。

常に防空頭巾を被れと言っていたが、それはなんのためだったのか。見ろ。胤子の防空頭巾は胤子の命を救えなかった。気休めでしかないものを押しつけるのもうやめにしてほしい。私はあなたたちを一生恨む。

突然、玄関の扉が開いて、中年の女の人が顔を覗かせた。

「まあ、そんなところに立っただけはいけない。さっさと入りなさい」

女の人につづいて、秋子は屋内に避難した。

「艦載機に追われたんだね」

全身をひどく震わせながら秋子は頷いた。

「まだその辺をうろろしているかもしれない。しばらくここにいなさい。一人で帰る

のは危険だから家の人を呼ぼう。電話は？」

秋子がかぶりを振った。

「じゃあ、住所と名前」

女の人が紙と鉛筆を持ってきた。秋子は震えてどうしようもない手でなんとか書いた。「お友だちが撃たれた。ふたりとも」

それを告げるのに、ひどく努力を要した。

「なんだって？」

女の人は血相を変えて外の通りを見に行った。

すぐに戻ってきた。ひどく落胆していた。

「事実を受け止めて。否定してもあなたの友だちは生き返らない。さあ、いろいろやる必要があるよ。でも、あなたはまず奥の部屋で休んでなさい。迎えを呼ぶから」

夕方になって、やっと俊秀が迎えに来た。

その夜、隣の大きな町がとうとう大空襲に見舞われた。

俊秀が通っていた軍需工場は跡形もなく消え去った。俊秀はとたんにやることをなくした。だが、途方に暮れて時間を無駄にすることはなかった。彼はすぐに執筆を開始した。胤子と房枝を亡くして、秋子は数日間寝込んだ。ふたりのお通夜と葬式にはかろうじて出席できた。しかし、気が動転していたので、ふたりの両親にちゃんとお悔やみの挨拶ができたかどうか、いまでも心許ない。

軍需工場もしばらく休んだ。工場長は厳しかった。しかし、雀の一件があったので、きついことが言えなかった。田中主任が取りなした。ついでに彼は言った。君の友だちは大丈夫。全身添木だらけだし、ちっとも餌を受け入れようとしませんが、少なくとも順調に快復してはいる。

そしてある日、俊秀が町の中心部で聞いた、とんでもない報せを家族にもたらした。

「一緒に来るかい？」

兄に促されても、秋子はなかなか決意できなかった。うんと言えば、すぐに見に行くことができる。操縦士はまだ生きている。墜落したが、大破はせず、アメリカ兵は負傷して身動きができないところを町の人たちに捕まった。いまでは、捕虜は町の役場にとりあえず収容されている。

「ほんとは見たくないんだろう」

俊秀は秋子に言った。彼は、この街に墜落した米軍の艦載機やその乗員を目撃すれば、

秋子がきつと恐慌を来し、忌まわしい記憶を蘇らせると思っていたらしい。

もしも言葉を交わすことができたなら、自分は何を言うだろうか。それが全く予測できない。ほかならぬ自分のことなのに、自分の言動が完全に予測できないのだ。それに英語が話せなければ、何を言っても暖簾に腕押しだ。

「わかった。連れてって」

俊秀はそれ以上、秋子の真意を問いたださなかった。

役場は騒然となっていた。建物の外にも、人があふれている。その光景を見て、秋子は引き返したくなった。

近所のおじさんが、役場の出入口に陣取っていた。俊秀と秋子の姿を見ると、すかさず役場の中へ入っていき、すぐに戻ってきた。

「やあ、秋子ちゃん。俊秀くんも来たか。役場の人の許可を得た。さあ、中に入りなさい」おじさんが先導して、ふたりは役場の中に足を踏み入れた。

そして、秋子はひどく後悔した。俊秀の手をきつく握りしめた。俊秀が握り返してくる。米軍操縦士は町民の攻撃を受けて、全身が傷だらけになっていた。艦載機の墜落時の負傷もあるだろう。だが、怪我をしすぎている。明らかに、町の人たちの棍棒やその他の凶器、鈍器を受けたのだ。

いや、今まさに攻撃を受けている最中だった。

「誰も止めないのか」

俊秀が啞然としてつぶやいた。

そして、何かがきっかけになって、そこにいた町民の一群が捕虜へ一気に殺到した。手に思い思いの凶器を持って。集団心理であろう。彼らは明らかに米兵を殺そうとしていた。自分たちの手で決着をつけるのだ。我が国の軍がやってくる前に。現に、町の最大の有力者の娘も、こいつらに殺されたではないか。

ひとりが鈍器で米兵の頭を殴打した。米兵はどうと倒れ込んだ。悲鳴は上げなかった。悲鳴を上げられるだけの体力も残っていなかったのだ。

もうひとりが、出刃包丁を振りかざした。

「やめて！」

少女の叫び声が、それを遮った。

いったいどこの誰がこの鬼畜米英を庇うのか。出刃包丁を持った男は啞然となり、包丁をだらりと下げて声の主を探した。

その目が秋子の姿にとまった。

俊秀が全身で秋子を庇おうとした。

その必要はなかった。その頃には、秋子は叫び声を上げたのは自分だということに気づき、我ながら驚いていた。秋子は自分がかえって攻撃の対象になりうることを十分承知していた。それでも、足は一歩前へ踏み出した。

「やめて！」

秋子はふたたび叫んだ。男は包丁を床に落とした。その他の町民も、思い思いの武器代わりに振りかざすのをやめた。おそらくは、叫んだのがほかならぬ、艦載機に殺された少女であることに気づいたのだろう。

「やめて！」

秋子はみたび叫んだ。両目が涙でぐしょぐしょになっていた。彼女は俊秀と手をつなぎながらその場にくずおれた。

秋子は泣きじゃくった。その泣き声が、群衆の喧噪をかき消した。